



除夜の鐘を大晦日の夕方につく理由

十二月のことばは令和五年十一月九日、日経新聞歌壇の掲載された俳句です。選者の紙野紗季さんが次のように評しています。「成道会は十二月八日、お釈迦さまが悟りを開いたことを祝う法会だ。真珠湾攻撃と同日、あらためて人間の在り方を考える」。

戦争といえば、今年（令和七年）、十一月二一日の日経新聞第一面、「春秋」欄が俳優の仲代達矢さんの訃報を伝えていました。

「トッププロになれるのは10万人に一人」。仲代達矢さんが俳優座養成所に入る際にかけられた言葉だという。人見知りで無口な19歳は、役者には向かぬと自分でも感じていた。だが負ければ食つていけない。貧しかった幼少の記憶もバネにひたすら稽古に打ち込んだ。

▼〈途中略〉東京が焼き尽くされた大戦末期12歳。空襲で近所の少女の手を引いて逃げ惑ううち、ふとその手が軽くなる。少女は腕だけになっていた。供養もできず、後々夢にみた。反戦の姿勢は際立つていた。「始めるスイッチはじくら」でもある。なのに始でもね、いつも熱心に寺からの便りを読んでもくれる人ばかりではない。

透明封筒に入れられた寺報はそのまま「ミ 箱へ直行、なんて人もおられるでしょうか。そんな方が「たまには、読んでみるか」と便りをひらいた時、「なんで、除夜の鐘を深夜につかないのだ。手抜き住職め」と邪推されるのもシャクなので、今年も書きます。

結論を言つてしまえば、除夜の鐘を深夜につく歴史はそれほど古いことではなさそうですが、長い年月にわたって続けられてきたことならば、守らなければいけないけれど、新しいことならば、変えても不都合はないだろう。たとえば、日本民俗学の創始者・柳田國男が当時的人は、「日の入りとともに一日が終わる。除夜の鐘をきいては昔からの日本人の年の取り方ではない」（『柳田國男全集第二十巻』筑摩書房）と指摘しています。

そして、ある歴史学者は「江戸時代において除夜の鐘が撞かれていたという事実自体が確認できない」と結論づけ、東京の浅草寺と

境内の北、旧中山道に面したところにある伝道掲示板の令和6年12月に掲載するものを紹介します。



伝道掲示板には1ヶ月にひとつの言葉を紹介しています。絶典の引用であったり、詩や小説のなかの言葉であったりします。道ばたの1メートル四方の掲示版ではお伝えできない、ことばの周辺はblogに載せています。

「トッププロになるのは10万人に一人」。仲代達矢さんは俳優座養成所に入る際にかけられた言葉だという。人見知りで無口な19歳は、役者には向かぬと自分でも感じていた。だが負ければ食つていけない。貧しかった幼少の記憶もバネにひたすら稽古に打ち込んだ。

空襲で近所の少女の手を引いて逃げ惑ううち、ふとその手が軽くなる。少女は腕だけになっていた。供養もできず、後々夢にみた。反戦の姿勢は際立つていた。「始めるスイッチはじくら」でもある。なのに始でもね、いつも熱心に寺からの便りを読んでもくれる人ばかりではない。

透明封筒に入れられた寺報はそのまま「ミ 箱へ直行、なんて人もおられるでしょうか。そんな方が「たまには、読んでみるか」と便りをひらいた時、「なんで、除夜の鐘を深夜につかないのだ。手抜き住職め」と邪推されるのもシャクなので、今年も書きます。

結論を言つてしまえば、除夜の鐘を深夜につく歴史はそれほど古いことではなさそうで、長い年月にわたって続けられてきたことならば、守らなければいけないけれど、新しいことならば、変えても不都合はないだろう。たとえば、日本民俗学の創始者・柳田國男が当時的人は、「日の入りとともに一日が終わる。除夜の鐘をきいては昔からの日本人の年の取り方ではない」（『柳田國男全集第二十巻』筑摩書房）と指摘しています。

そして、ある歴史学者は「江戸時代において除夜の鐘が撞かれていたという事実自体が確認できない」と結論づけ、東京の浅草寺と

十二月のことばは令和五年十一月九日、日経新聞歌壇の掲載された俳句です。選者の紙野紗季さんが次のように評しています。「成道会は十二月八日、お釈迦さまが悟りを開いたことを祝う法会だ。真珠湾攻撃と同日、あらためて人間の在り方を考える」。

戦争といえば、今年（令和七年）、十一月二一日の日経新聞第一面、「春秋」欄が俳優の仲代達矢さんの訃報を伝えていました。



「軍は氣違ひじや。氣違ひが走る
ときは普通人も走る。日本の軍
といふ氣違ひが、刃物をもつて
龍澤寺で多くの雲水（修行僧）を育てました。
玄峰老師は開戦の日、次のよ
うにおっしゃつたといふ。『田中
千田完治 清玄自伝』（文藝春秋）から引用
します。

はじめたらやめられない戦を、終わらせるために陰で動いたといわれる禪僧がおられます。山本玄峰老師（1866～1961）です。玄峰老師は数奇な青春時代をへて得度、荒廃して、いたいくつもの寺院を再興し、妙心寺派管長をつとめ、静岡県三島の龍澤寺で多くの雲水（修行僧）を育てました。

玄峰老師は開戦の日、次のようにおっしゃつたといふ。『田中千田完治 清玄自伝』（文藝春秋）から引用します。

はじめたらやめられない戦を、終わらせるために陰で動いたといわれる禪僧がおられます。山本玄峰老師（1866～1961）です。玄峰老師は数奇な青春時代をへて得度、荒廃して、いたいくつもの寺院を再興し、妙心寺派管長をつとめ、静岡県三島の龍澤寺で多くの雲水（修行僧）を育てました。

玄峰老師は開戦の日、次のようにおっしゃつたといふ。『田中千田完治 清玄自伝』（文藝春秋）から引用します。

十二月のことば

パールハーバー

枕に法話

成道会

朝田黒冬

はじめたらやめられない戦を、終わらせるために陰で動いたといわれる禪僧がおられます。山本玄峰老師（1866～1961）です。玄峰老師は数奇な青春時代をへて得度、荒廃して、いたいくつもの寺院を再興し、妙心寺派管長をつとめ、静岡県三島の龍澤寺で多くの雲水（修行僧）を育てました。

玄峰老師は開戦の日、次のようにおっしゃつたといふ。『田中千田完治 清玄自伝』（文藝春秋）から引用します。

はじめたらやめられない戦を、終わらせるために陰で動いたといわれる禪僧がおられます。山本玄峰老師（1866～1961）です。玄峰老師は数奇な青春時代をへて得度、荒廃して、いたいくつもの寺院を再興し、妙心寺派管長をつとめ、静岡県三島の龍澤寺で多くの雲水（修行僧）を育てました。

玄峰老師は開戦の日、次のようにおっしゃつたといふ。『田中千田完治 清玄自伝』（文藝春秋）から引用します。